



【川と果実】

## 幻の洋ナシ「ルレクチエ」と輪中地帯



新潟市南区の白根地区は、江戸時代から果樹栽培が盛んで、新発田藩主にナシを献上した記録もある。ここは日本有数の大河・信濃川とその支流・中ノ口川に挟まれた氾濫原だが、それを逆手にとつてナシや西洋ナシを育ててきた。ベテラン農家と若手農家、それぞれの姿を追う。

### 洪水による土壌で 100年枯れないナシ

河川敷に「ルレクチエ」のナシ畑が広がる。新潟市南区大郷。すぐそばを流れるのは信濃川だ。西洋ナシ（洋ナシ）といえは「ラフランス」が有名だが、ルレクチエはとろけるような甘味と芳醇な

香りが特長の、知る人ぞ知る「幻の洋ナシ」。ルレクチエは日本の洋ナシ生産面積のわずか約8%だが、そのうち新潟県の生産が80%を超えている。

長谷川果樹園の園主、長谷川英昭さんが説明してくれた。

「4月の開花期になると手作業で5本の雌しべに一つずつ花粉を乗せていく受粉作業が始まります。

# 川が運んだ 肥沃な土から







信濃川と中ノ口川に囲まれた  
輪中地帯にある白根郷

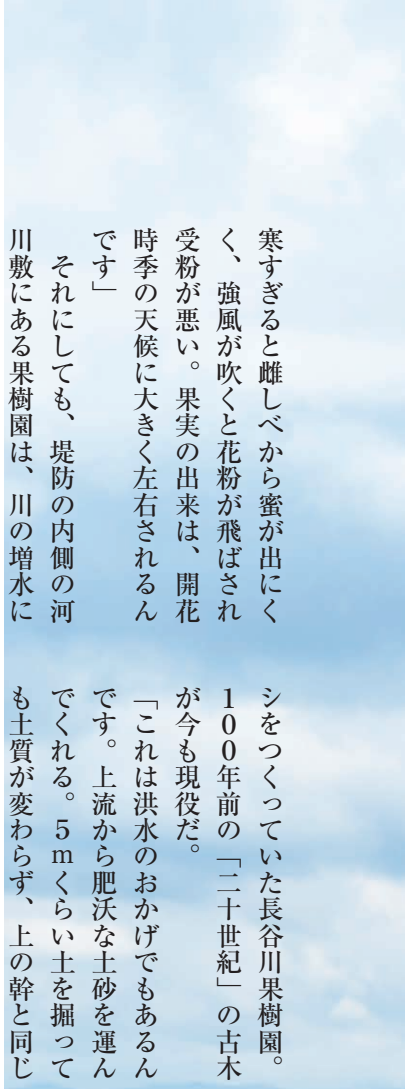
「今でも10年に一度は、破堤こそしないものの大きな洪水があります。もともとナシは水に強い作物です。木が完全に水没しても、流れ水のなかにいるうちは木自体は傷みません。昭和の末に冠水したことがあり、その年の果実は売り物になりませんでした。翌年からは普通に栽培できました」  
英昭さんの曾祖父の時代からナ

JA新潟みらい提供の資料および  
国土地理院基盤地図情報「新潟」  
をもとに編集部作図

年（明治29）、越後平野  
全域が泥の海と化した  
「信濃川大洪水（横田切  
れ）」を機に計画が再  
燃。1909年（明治  
42）から12年の歳月を  
かけ「東洋のパナマ運

「追熟」した出荷時期が  
お歳暮シーズンに

越後平野のほぼ中央部にあたる  
輪中地帯の白根郷（市町村合併により  
新潟市南区の一部となった旧・白根市）では、  
二つの河川がもたらす肥沃な地質  
を利用し、江戸中期からモモやナ  
シが栽培され、舟運で近郊地に流  
通されていた。  
信濃川の氾濫による水難を軽減  
するため、下流で分水し海に流す  
計画は江戸中期からあったが実現  
しなかった。1896



1 信濃川左岸の堤外地に設けられた白根地区のナシ畑。右上はこの地の特産品として  
育てられている洋ナシ「ル レクチエ」提供：JA新潟みらい 2 3 4 2011年夏の「平成23  
年7月新潟・福島豪雨」によって完全に水没した白根地区のナシ畑と濁流に吞まれて汚  
れた日本ナシ。こんな状態になっても水が引けばナシの木は復活し、翌年には例年通り結実  
するという 提供：JA新潟みらい 5 洋ナシ「ル レクチエ」の商品化にチャレンジした長谷  
川英昭さん。信濃川が運ぶ土砂がナシを支えていると話す



河」とも呼ばれた大事業「大河津分水」が完成した。

これによって大規模な水害が減り、白根郷では米、野菜、果樹を組み合わせた農業経営が進められた。堤防外でナシを栽培していた大郷地区では、河川敷を活用する安定したナシ栽培が可能となり、白根郷でもっとも収量を増やした。

1902年（明治35）、白根郷茨曾根村の農家、小池左右吉はナシの販路調査のためウラジオストクに渡航し、洋ナシに出合った。これを栽培し輸出すれば高く売れると、原産地フランスから34品種の苗木を取り寄せて栽培を始めた。しかし栽培が難しいので増殖には至らず、その後は各農家が自家用として1本ずつ植えている程度にとどまった。

はるか時代が下って1981年（昭和56）。食べるとおいしい洋ナシの商品化に再挑戦する人たちがいた。その「白根市西洋梨研究会」（以下、研究会）を立ち上げたのが長谷川さんだ。

「会員が14人。本気になってもらうため10a（約1000㎡）以上つくるのを条件としました。皆さん一生懸命でしたよ」

数ある品種を試したが、結果的に残ったのが、収穫までの期間が

長い晩生種のルレクチエ。明治期の導入時、10月中旬〜下旬の収穫時には実が硬くて甘くなかったが、甕に入れたままにして正月に食べてみたら柔らかくて甘い。デンプン質が糖分に変化する「追熟」の過程を経るとおいしくなることを偶然発見していた。

保管して追熟し食べごろの出荷時期が、ちょうどお歳暮シーズン。贈答用の高級果実として商品化できると研究会では考えた。しかも、日本ナシは8月、ルレクチエは10月と収穫時期が重ならないのも好都合だった。

ただし、長い生育期間に応じて防除（病害虫などの予防と駆除）の回数も多い。日本ナシと病気の種類も原因も違い手探りが続いた。苗木から実をつけるまで5〜6年、量がそろいのさらに3〜4年かかったが、「東京・神田の青果市場に持ち込むと1箱4kgに1万5000円という破格値をつけてくれました。これは今と比べて3倍の値です」と長谷川さん。苦労は報われた。「幻の洋ナシ」の市場流通を待ち望んでいる卸売業者が多かったのだ。

研究会は会員数が70人程度になった1992年（平成4）、白根市農協果樹部会に移管。こうしてル

レクチエは、原産地の南フランスの気候とも比較的近い新潟県の特産品となった。

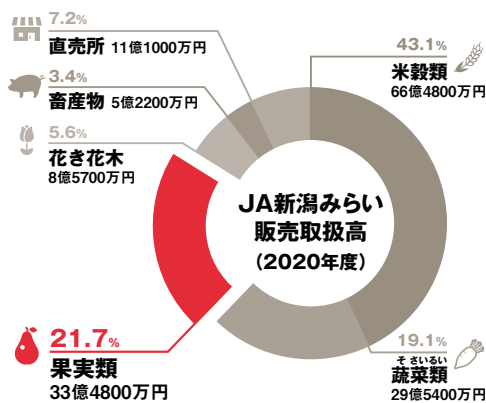
### 常識にとらわれず 自分らしいやり方で

日本の農業の実態と同じく、白根の果樹農家は減少傾向にあり、60歳以上の経営者のうち後継者がいるのは23%に留まる。だが洋ナシのルレクチエの栽培面積は40ha未滿と、最小ながらも堅調に維持されている。

JA新潟みらい営農経済部フルーツフラワーしろねの高橋隆夫さんは、果樹の将来について「生産量が減るとはいえ、より消費者に好まれる甘みの強い品種への更新でまだまだ伸びる」と見ている。なかでもルレクチエは認知度が低いからこそ伸びしろがある。「口にしていただくことが認知度を高めるいちばんの近道。コロナ禍で中断していますが、店先での対面試食販売に力を入れていきたい」と高橋さんは話す。

ルレクチエを育てつつ、新しいスタイルも模索する若手農業者がいる。「FARM GENTS」（南区赤巻）の山田烈矢さんだ。

山田さんは母親の実家のナシ農



JA新潟みらい提供資料をもとに編集部作成（構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても100とはならない）

長谷川英昭さんたちが立ち上げた「白根市西洋梨研究会」をサポートしたJA新潟みらい営農経済部の高橋隆夫さん。今も営農指導に携わる



家を継ぐ26歳。農業大学校を出て20歳で農業の道に入ったころは「地道で単調な作業に嫌気がさした」そうだが、「2年目から個人で販売も始め『おいしかった』と直接言われると、がんばっていいものをつくらなければと思うようになった」と言う。

第二の転機が2019年（令和元）の春。プラム農園を営む先輩の「常識にとらわれず好きなことをやってみれば？」との助言に強





6

6 「FARM GENTS」の山田烈矢さん(左)とJA新潟みらい営農経済部の中村啓一さん(右)。二人は同じ年齢なので息もぴったり。山田さんはこの服装で農作業をする



8



7

7 山田さんのオフィス。納屋をカフェ風に改修 8 山田さんがデザイナーに頼んで仕立てたルレクチエの出荷箱

く背中を押された。

まずは「カッコいい服装で農作業をしたい」と考えた。山田さんはモノトーンのお洒落な出で立ちだが、実はこれが作業着。「自分の好きなことをプラスしたら仕事がおもしろくなるし、それを見た子どもたちが少しでも『農業って意外にかっこいいかも』と感じてもらえたらうれしい」と山田さん。

次にルレクチエの出荷用の箱を、高級贈答品にふさわしい洗練されたデザインに一新した。

「とびきりおいしい果物なのに、『T H E 農産物』みたいな箱に入っているのはいらないです。農家名の『G E N T S』はジェントルマンの意味。紳士のように果物にもお客さまにも丁寧な対応をしておいしさを提供する、というポリシーを表しています。ネットで検索して新潟でいちばん評判の高いデザイナーさんに頼みました」

### 次代を担う若者が 広める魅力と人脈

山田さんが加入しているJA新潟みらいしろね果樹部会青年部のナシ生産者は、子どもたちに地域農業の魅力を伝える取り組みを続けている。小学校でのナシ栽培体

験の出張授業では、児童の父親が先生役になることもある。

また、果樹、米、野菜、花きなど作物の枠を越え、若手農家を横につなぐ「しろね農業青年部」の活動にも、山田さんは取り組む。

「作業が集中し人手不足になる時季に、学生や主婦や定年退職者の方々にお手伝いしていただくシステムをつくらうとしています」

公益社団法人にいがたイナカレッジの地域支援事業を利用し学生の手を借りたことがある。

「頼んだ以上の仕事をしてくれました。『人の役に立ちたい』という学生さんたちで、若者も捨てたもんじゃないでしょ?」と、自身も若者である山田さんは笑った。

この春、山田さんは先輩農家が手放すことになったルレクチエを含む洋ナシ園地を譲り受けた。苦労してきた先達の背中を見て育った若者が、自分らしさを模索しながら挑む。それはどんな未来につながるのだろうか。

(2021年4月30日取材)



上越新幹線のホームでルレクチエの生果とスムージーを販売する山田さんと「にいがたイナカレッジ」の学生ボランティア 提供：山田烈矢さん



【川と果実】